新美南吉記念館だより

NIIMI NANKICHI MEMORIAL MUSEUM NEWS

発行　新美南吉記念館　〒475-0966　愛知県半田市岩滑西町1-10-1　Tel. 0569-26-4888　http://www.nankichi.gr.jp

34の歴史をかぞえて

二月十八日（土）、半田市市民交流センターにて第三十四回新美南吉童話賞の表彰式を行ないました。

平成元年からスタートした新美南吉童話賞も既に三十四回を数えました。二十九歳で亡くなった南吉の生涯より、歴史を重ねつつあります。そんな中、今回は新美南吉オマージュ部門の大賞作品が最優秀賞も受賞するという、初の快挙が達成されました。

表彰式ではまず、半田市教育長がこのことに触れ、「南吉も〝一枚の葉書〟などオマージュ作品を書いている。そんな風に、今後も南吉や先輩受賞者に続く人が出て欲しい」と挨拶しました。それから表彰状の授与へと移り、出席した十五名の受賞者たちに賞状が手渡されました。

続く作品講評では、審査員長の藤田のぼる先生が登壇し、「お話を書くうえで人物設定はとても大事。最優秀の作品は登場人物の書かれてない普段の様子が見え、奥行きがあった」と話されました。今年は良い作品が集まり、審査も楽しかったそうです。

また、最優秀賞を受賞した伊東葎花さんにもスピーチしていただきました。伊東さんは二年前、オマージュ部門で特別賞を受賞したものの、コロナ禍による規模縮小で表彰式に参加ができず、その際贈呈された『新編　新美南吉代表作集』で〝狐〟をじっくり読み返したことが、今回の作品につながったそうです。最後に「本当に幸せで胸がいっぱいです」と結ぶと、会場から温かい拍手が送られました。そんな伊東さんの受賞作〝きつねの母さん〟を、南吉童話お話の会〝でんでんむし〟に朗読していただき、閉式へ。

式の後には、出席者と新美南吉童話イメージキャラクターのごん吉くんで記念写真を撮りました。

受賞者へのインタビュー

自由創作部門最優秀賞と新美南吉オマージュ部門大賞を受賞された、伊東葎花さんにお話を伺いました。

――受賞の連絡が来た時に、どう思われました？

電話で連絡をいただいた時は、何の賞とは言われなかったので、通知が来てから初めて最優秀賞というのを知って、帰ってきた娘に「これ最優秀って書いてあるよね」「書いてあるよ」って確認しちゃったくらいびっくりしました。まさか最優秀をいただけるとは。

――創作を始められたのはいつからでしょう？

十年ちょっとぐらい前から小説ブログを始めたんです。最初はブログで満足していたんですけど、いろいろ賞に応募してみたらって友人にいわれて、それがきっかけで応募もするようになりました。

――そもそもどうしてブログを始められたのですか？

お話をつくったりするのが好きで、よく話をつくって娘に聞かせたりもしていたので、そういうのもあって……。

――今回、オマージュの対象作品に「狐」を選ばれたのは何故でしょう？

まず「狐」の話を書きたかったというのもあるんですけど、実は去年も「狐」で作品を送ってるんです。でも去年は全然駄目だったので、もう一回じっくり新美南吉さんの「狐」を読み返して、その世界観を壊さないように書いたのが今回の話です。

――「狐」は一人っ子のお話ですが、受賞作は初めから兄弟のお話として思いつかれたのですか？

まず夜道を歩く男の子の兄弟二人が浮かんだんですね。やっぱり女の兄妹（きょうだい）だとちょっと違うかなと思って。子どもの頃は男の子の方が純粋っていうか……。でも特にそんな考えもなく情景が浮かびました。

――童話を書くうえで、意識されていることはありますか？

最初書き始めた頃は、本当に子ども向けってことを意識して書いていたんですけど、友人から「あまり子ども向けってのを考えないで書いた方がいいもの書けるんじゃない？」っていわれて。今はあまり子ども向けってことではなく、大人が読んでも面白いようなものにしようと思って書いています。

――今後の目標があれば教えてください。

童話に限らずいろんなお話、小説とかにもチャレンジしていきたいなと思っています。もともとショートストーリーとかショートショートを書くのが好きだったので、そっち方面でも取れる賞があったら取ってみたいですし、長編にも挑戦してみたいです。

＊

伊東葎花さんの受賞作「きつねの母さん」は、記念館ホームページにて公開中です。下記ＱＲコードよりご覧ください。

新美南吉没後 80 年「貝殻忌」

３月 22 日は南吉の命日「貝殻忌」です。今年は３月 18 日（土）～ 22 日（水）にかけて様々なイベントを開催します。南吉へのメッセージ等も募集しますので、それぞれの形で南吉を偲んでください。

3/18
- 折花体験ワークショップ
- 筑前琵琶コンサート～新美南吉を偲び八十年～
- 童話の森の上映会

3/19
- 「音楽でたどる新美南吉の生涯」半田篇 ～半田・安城連続レクチャーコンサート～
- 歌とお話の会

3/21
- ネイチャーゲーム～自然の中で南吉を感じよう～
- AMI　南吉を歌う
- 貝殻忌ウォーク～ガイドと歩く文学散歩～
- 南吉講談席

3/22
- 新美南吉没後 80 年「貝殻忌」式典
- 紙ランプづくり
- 蓄音機コンサート

3/18 ～ 22
- 南吉クイズ

各イベントの詳細は記念館 HP へ
◀ 新美南吉記念館 HP

南吉とわたし ㉔ 写真家 相地 透

私の住んでいる町は、名古屋の熱田です。熱田神宮から歩いて数分の所に生まれ、十代後半から二十代にかけての十数年を首都圏で暮らしました。今、再び熱田に住み、冊子や本をつくる仕事をしています。

冬の夕暮れ、かつて東海道で唯一の海里の渡し場であった七里の渡しを訪ねると、穏やかな運河の流れに身を委ねて、数百羽のヒドリガモが浮いていました。冬をこの地で過ごして、春を前に旅立って行きます。

春になり、熱田神宮の周辺を歩くと、大通りに沿った石垣にはたくさんの草花が咲いています。オオイヌノフグリ、タンポポ、ホトケノザ、ハルジオン……数十の草花が、春を通し、都市部のこの場所に息づいています。そこに、ベニシジミやヤマトシジミなど南吉の愛した蝶たちがやってきます。

エノコログサが青い穂を路傍に揺らす、初夏。クビキリギスは、樹の上で「ジー……」と、月夜に翅を振るわせています。梅雨が終わり、夏がやってくると、アスファルトに空気が熱せられて、外に出るのも億劫になります。窓を開けると、土から出て来て脱皮したセミたちが、待ちわびた夏の到来に、生命賛歌の音を一斉に鳴らしています。

百日紅が花を路傍に飾るお盆が過ぎる頃。日が暮れはじめると、虫の音が聞こえてきます。こおろぎ、きりぎりす、それぞれの仲間たち。大きく環境が変わらない限り、毎年ほとんど同じ場所にあらわれて、特徴のある鳴く音を街に響かせます。

秋になり、暑さが一段落して、周囲に目が向くようになると、神宮の石垣、児童公園、道端などで、ツユクサ、イヌタデ、アキノノゲシといった草花が涼し気に咲（わら）っています。一年が終わりを迎える時期になり、凍えながら見上げた夜空には、オリオン座が輝き、年をまたいで再び、冬鳥たちがたくさん、水辺に見られるようになります。

南吉は詩に、身近な自然の様子を描いています。私は、知多半島を回りながら、土地に息づく自然を写真に撮影しています。雑木林や海や田んぼや川の様子と、そこに暮らす生きもの達の姿。南吉の生きた時代と比べると、知多の環境は大きく変わっています。私が見ている姿は、南吉が見たものとは、かなり違ったものになっているはずです。

それでも、熱田や知多で出会った風景や生きもの達と、南吉が日々の生活を綴っていた日記に書き留められた詩が、ふと、重なる時があります。それは南吉が、社会や環境といった、時代によって移ろいゆくものを詩に描いているのではなく、それらの元となる自然や生きもの、風土といったものに愛着を持っていて、少し気に留めて目を向けていれば、誰もが気づくことが出来るような事がらを、詩に描いているからだと思います。

十一月から記念館で企画展「詩と游（あそ）ぶ・新美南吉と知多の自然」を開催します。「詩と游ぶ」という題の「游」は、「あそぶ」という意味のほかに「ただよう」という意味を持ちます。岩滑に来て、南吉の詩と游びませんか？　南吉の詩を体験し、ご自身の身近にも感じてくださったら、とても嬉しく思います。

執筆者プロフィール

写真家・編集者。身近な自然を観察し撮影することをライフワークとし、独自の（しょし）観察会を各地で開催。書肆花鑢（はなやすり）の屋号で出版活動を行う。「 LIFE with Nature, Culture, Literature and Children 」をテーマに掲げる冊子、月刊「HANAYASURI」を発行するほか、詩集など本の制作を手掛けている。

著作紹介　／　『in the pen.』（書肆花鑢）
文・写真：相地透

「知多半島をめぐる」というテーマで自然の様子を観察した写真集です。季節を巡るようにして、知多半島で撮影した樹木や草花、小さな生き物たちの様子を紹介しています。

「ごんぎつね」朗読リレー、始動！

三月四日（土）、半田市市民交流センターで「ごんぎつね」朗読リレー説明会を開催しました。これから発表会へ向けて、本格的に練習をスタートさせます。

朗読リレーは新美南吉生誕百十年記念事業の一つとして開催するものです。南吉のふるさと半田に住む小学生たちが、二十四人で「ごんぎつね」を読みつなぎます。来年三～六年生になる小学生を対象に二月十日（金）まで募集し、学年によっては公開抽選も行ない参加者を決定しました。

朗読の指導は元NHKアナウンサーの山根基世さん（下写真）と、南吉童話お話の会〝でんでんむし〟にお願いしています。説明会では指導者の皆さんもお呼びして、全員で自己紹介の時間を取りました。子どもたちの中には緊張でなかなか声が出せない子もいましたが、どの子も「好きな南吉作品」などのお題に、自分なりの理由をつけて話してくれました。これからが楽しみです。

その後は練習日程などの説明をして、山根さんに朗読についてのお話を伺いました。筋を伝えるだけでなく、聞いている人の心に届けるのが〝朗読〟だという山根さん。そのためには、みんなと話すことが重要だと語ります。私たちは自然と日本語を話していますが、それは幼い頃にいろんな人の言葉を聞いて、自分の力で覚えたもの。それと同じように、「ごんぎつね」を読んで疑問に思ったことや分からなかったことを、周りの大人たちとも話していくことで、南吉が思い描いた通りの大きな世界を築くことができるのだと話されました。山根さんが考える朗読リレーの目的は、「ごんぎつね」を上手く朗読できるようになることではなく、言葉の力を育てることにありました。

それから、簡単な発声練習も行ないました。十一種の早口言葉を子どもたちが一生懸命に、時にクスリとしながら復唱して、説明会は終了へ。和やかな空気で朗読リレーがスタートしました。

今後は、四月から月に二回練習を行ない、七月三十日（日）の南吉の誕生日に本番を迎えます。

日誌抄・・

一月（睦月）

▼4日　企画展「ストップモーションアニメーションごんの世界　2023」始まる（～4月9日）▼同日「令和4年度新美南吉読書感想画コンクール」の受賞作品を展示（～2月5日）。期間中来館者数4783人▼4・5日「新美南吉生誕110年開幕祭」。949人参加▼4～15日「〝うさぎ〟を探しに生家に行こう」。56人参加▼22日　第186回新美南吉読書会。13人参加▼同日　東京新聞・中日新聞で社説「拾った『らっぱ』の使い道」が掲載される

二月（如月）

▼11日「ペーパーアート教室」。9人参加▼18日　第34回新美南吉童話賞表彰式。於半田市市民交流センター▼19日「ごんぎつね」朗読リレー公開抽選会▼26日　第187回新美南吉読書会。12人参加

ご寄附のお礼

新美南吉顕彰基金へご寄附くださった皆さま、誠にありがとうございました。令和四年度に一万円以上のご寄附をされた方のお名前を掲載いたします。（希望者のみ・五十音順・敬称略）

▪あなただけに読む朗読会 実行委員会
小堀 望
▪井奥 成彦
▪石川 恵深
▪大見 博昭
▪小畑 歩夢
▪神田 一孝
▪澤田 喜久子
▪杉浦 正敏
▪髙城 茉那
▪蜷川 美登里
▪林 眞紀
▪平瀬 遊絵
▪藤田 英樹